シリーズ・農と生きる障害者 7

農業生産法人 株式会社GRA

ITで実らせた、一粒一〇〇〇円のいちご

編集部=文
text by KOTONONE
河野 豊=写真
photograph by Yutaka Kohno

町の半分が、津波によって海水に沈んだ宮城県・山元町。東北一のいちごの産地はいま、震災前とは違った、新しい農業のカタチを東北から日本へ、そして世界へ、発信しようとしている。

副社長の橋元洋平さん

駅も、いちご畑も流された

山元町に入りしばらく車を走らせると、雨上がりの空に、虹がかかっていた。目を奪われていると、虹のふもとに、工事中の高架橋が目に入った。津波で流され、内陸に移設、急ピッチで工事を進める常磐線の線路だ。二〇一一年三月一一日、津波は宮城県最南端に位置する海沿いの町、山元町にも到達した。県北と違ってここは津波が来ない、そう言われていた地域だった。

しかし、津波はやって来た。海岸線を走る常磐線の線路を軽々と超え、駅を流した。町のおよそ四割が、水に沈んだ。

海の近くには、いちご畑が広がっていた。砂地で冷たいやませが吹き、日照時間も長い。いちご栽培には絶好の環境。沿岸地域は隣の亘理町と合わせ、東北一のいちごの産地だった。しかし町内に一二九軒あったいちご農家は、津波でほとんど流された。残ったのはたった五軒。震災前の山元町のいちごの出荷高は、年間約一三億円。町の一般会計予算が当時四五億から五〇億円だから、その影響の大きさは甚大だ。町は一日にして、主力産業を失った。

震災前に戻すだけじゃ、この町は成り立たない

「戦後の焼け野原みたいだ」。

ふるさとを失うとは、こういうことか。岩佐大輝さんは震災後の町を見て、何度も、夢じゃないかと思った。

東京でITの会社を経営していた岩佐さんは、震災後ふるさとの山元町にボランティアとして通ううちに、いちごの栽培をビジネスとして再建することで、町の復興を支援したいと思うようになった。

すべて流されたゼロからの出発。海水をかぶった土はもう作物の栽培には向かないし、井戸水も使えなくなった。農家の高齢化も進んでいる。震災前に戻したところで、先細っていくのは、目に見えていた。

震災の一〇年以上前から、山元町の人口は減少の一途をたどっていた。若者の多くが学校を卒業すると、町を出て行く。復興には、山元町に持続、発展し続ける強い産業を新たに